[図画工作・美術]

図画工作科における言語活動の有効性に関する検討

－流木を材料とした二つの実践（５年生・６年生）を通して－

舘岡　牧子*

１　問題の所在

平成23年度から全面実施となる新学習指導要領では，「言語活動」の充実が改訂のポイントの一つとして強調されている。総則では，「思考力・判断力・表現力をはぐくむ観点から，児童の言語活動を充実すること」[1]とされている。図画工作科の学習では，このことをどのように捉え，どのように指導過程に位置付けていけばよいのだろうか。どのような言語活動を行うことが図画工作科における思考力・判断力・表現力の伸長に寄与することができるのだろうか。そこで，まず，これまでの図画工作科の実践を振り返り，言語にかかわる活動がどの場面に導入されていたか振り返ってみることとした。

図画工作科の学習では，作品制作前のイメージ，制作途中の思い，完成作品を見て感じたこと等は，心の中にある言語として大事にされても，文字や音声としては表現されないことが多い。作者の心は作品として表され，伝達される。それを読み取るおもしろさはあるが，そういった受け身の鑑賞活動は広がりがない。一方，展示の際の作品説明や，鑑賞カードに書かれた友だちからの感想等は，文字表現されることも多いが，ともすると内容がパターン化しがちであった。書かなければならないから，適当にいつもと同じような内容で書く。そのような文章が多かった。作品説明については，児童が伝えたいことを明確にすることができていない，書く必要性を感じていないといったこと等が理由として考えられる。鑑賞カードへの記述については，作品の世界に浸り切れていない，良さを捉えることができていない，といったこと等が理由である。

このように，図画工作科では，これまではそれぞれの場面で言語活動はそれほど重視されてきていない。

つくる喜びを感じながら意欲的に表現活動に取り組めば，伝えたいことは溢れてくる。「ここを見てほしい」という思いが必然的に言葉に表れてくる。これらの思いをきちんと言葉として表現することで表現意欲や企画を鋭角的にするとともに，それを聞いたり読んだりした鑑賞者は，作品への理解を深め，より豊かな鑑賞活動を展開することができる。つまり，魅力的な題材を工夫し，さらに制作過程で生まれてくる言葉を大切に扱っていけば，表現活動も鑑賞活動も充実させることができる。それは必然的に，新学習指導要領で示されている「思考力・判断力・表現力」等を育成することにつながる。ここに図画工作科での言語活動の意義があると考える。

林（1987）は，表現のプロセスを言語系と非言語系に分け，「非言語系である音楽や絵画だけでは伝わらない部分を国語などの言語系が筋立てて伝える」としている。また「図画工作科の中での言葉の役割を研究することは，図画工作科の教育において非常に有効である」[2]とも述べている。

以上のことから，様々な場面で言語活動を取り入れた図画工作科の授業実践に取り組むことにした。

２　研究の目的

図画工作科の学習過程に，「書くこと」と「話すこと」を中心にした言語活動を意図的に取り入れることにより，表現活動や鑑賞活動のより一層の充実を図ることができることを検証する。

３　研究の構想及び方法

本研究では，言語活動の充実を図るため，国語科と関連させた活動を仕組む。また，図画工作科としての表現活動をより豊かなものにするため，総合的な学習と関連させて目的意識を明確にしながら活動を展開することにも取り組んでいく。

(1)　制作にかかわる思いの蓄積と情報の取り出し　～国語科で育成した言語能力の活用～

作品説明の文章を書くために様々な資料から必要な情報を取り出すという学習活動を国語科として設定する。資料

＊ 上越市立国府小学校

とは，まず，自らが書き溜めた日記や，友だちが書いた感想カードが挙げられる。これらには，児童の思いが蓄積されていく。次に，ポスターやパンフレット，作家の言葉などがある。これらは，児童が参考とするモデルになる。児童はこうした様々な資料の中から自分にとって必要な情報を取捨選択し，文章を構成していく。資料となり得るものを書くとき，資料を読み解くとき，国語の力が必要になるのである。そこで，教科横断的に捉え，言語能力を育成するための国語科の指導を行っていく。

⑵　話し合いによる完成作品への相互評価

完成した作品や作品説明の文章について互いに見せ合いながら，感想や意見を述べ合う学習活動を取り入れる。この話し合いによる相互評価により，児童の作品は練り上げられていく。新学習指導要領でも「Ｂ　鑑賞」のところで，「各学年の発達段階に応じた話し合う活動」[3] を取り入れている。また，奥村（2008）は，「自分という一人の個は，自己及び他者及び社会，文化，さらには自然や環境の中で個である。それぞれの関わり合う，話し合う，批評し合う，その中で初めて自分というものが生まれる」[4] と述べている。つまり，自分，または自分の表現を確立するためには，自分だけでは足りないのである。他者の考えに触れながら新しい自分を見つけていく児童の姿を検証していく。

⑶　作品と共に展示する作品説明の文章　～総合的な学習との関連を図る～

総合的な学習の時間と関連させるのは，主に相手意識・目的意識をしっかりと持たせるためである。学習活動の終末部に作品展を開催することを設定し，多くの人に見てもらおうと投げかける。自分の作品や思いを見る人に伝えるために制作に取り組み，文章を書くのである。ここで，作品説明の文章を書く必要性を強く感じることになる。また，見た人から感想をもらったり，直接話しながら説明して反応をダイレクトに感じ取る活動も仕組む。そうすることで，自分の伝え方がどうだったか児童自身が検証することができる。

また，扱う題材は，流木とする。これは本校ならではの地域素材である。いつも傍にあり，遊びや学びの場である海，砂浜。そこに散在している流木。子どもたちにとって，何度か手に取ったことがある身近な存在である。そんな流木が図画工作の材料となったとき，子どもたちは新たな発見をし，地域への愛着を深めることとなる。流木の魅力，自分たちの地域の特徴を伝えようと，意欲的に活動する姿を期待する。

４　実践Ⅰ：「それは海からやってきた!?」（５年生）

⑴　題材の目標

流木から自由に発想し，様々な材料や技法を試しながらつくりたいものをつくる。

⑵　題材について

砂浜に転がっている流木は様々な形や大きさをしており，どれ一つとして同じものはない。そんな流木から発想を膨らませ，「それは海からやってきた!?」というテーマで作品づくりに取り組むことにした。児童が拾ってきた流木からできたそれは，海からやってきた何かなのである。このテーマ設定は，表現活動への意欲を高め，また，作品説明の文章を豊かなものにすると考える。今までのように良くできた点，工夫した点だけの単調なものではなく，ストーリー性のある楽しい文章になることが期待される。

また，できあがった作品とその説明の文章（「私の流木ストーリー」として書く）は，展示して様々な人に見てもらうこととする。作品展（にじっこミュージアム）を開くことを伝えておけば相手意識も生まれ，自分の思いを伝えるために必要な事柄，言葉はどんなものかじっくりと考える姿につながる。作品からも文章からも思いが伝わるよう指導していく。

⑶　指導計画（資料１）

⑷　実践の概要

①　情報の蓄積　～図工科としての作品制作時の活動の様子や思いを「流木日記」に書き溜める～

「それは海からやってきた!?」の導入の段階で児童は海に出かけ，砂浜に転がっている流木と出会った。様々な形，大きさの流木の中から気に入った　　っ

に溜めていく。そのことが作品説明の文書を書くときに大切な情報となる。そこで，その情報を言葉として残していくために，「流木日記」に作品制作の記録を書き溜めてきた。（資料２）この「流木日記」は，経験や思いが文字となり書き記されることで，より鮮明になったという点と，文章を書くときに読み返して作品制作を追体験し，感動を思い起こすことができたという点で有効であった。

> 足りない流木をひろいに行った。ほしかった小さい流木をひろった。キラキラした楽しそうな魚の家にするために貝がらをひろった。ひろっている時，今日の流木と貝がらとこの前ひろった貝がらも合わせるといい感じになりそうだなと思った。何よりも，この前ひろった流木をどうやって組み立てたら楽しそうな家になるかを考えたら，ワクワクして，早く組み立てて完成させたいと思った。楽しみだなぁ。

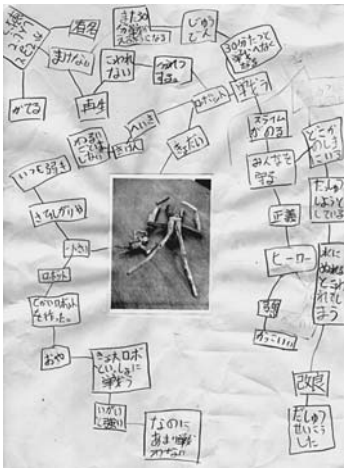
資料２（児童が書いた流木日記より）

②　相手意識・目的意識をもたせる　～にじっこミュージアムでの展示をめざす

学校行事である国府子どもまつりで「にじっこミュージアム」を開こうと呼びかけた。作品と解説文「私の流木ストーリー」を併せて展示し，多くの人に見てもらうという活動を設定することで，相手意識と目的意識をもたせようと考えたのである。目的が明確になることで，児童は，意欲的に取り組むようになった。

③　文章表現を学ぶ　～作家の言葉を読んで，思いが伝わる文章表現の特徴を捉える～

Ｕ・Ｇサトーとニキ・ド・サン・ファールの作品画像と，その作品を説明する言葉を提示した。作品を見ながら作家の言葉を読むと，作品を見ただけでは分からなかった制作のきっかけや動機，作品に込めた思いなどが伝わってくる。児童は，解説文を読むことで作者の作品への思いを知ることができ，作品理解が深まることを実感した。また，文章の書き表し方は，「私の流木ストーリー」を書くときに参考となった。



資料３（イメージマップ）

④　作品からイメージを広げる　～イメージマップを使って，でき上がった作品から想像するイメージやストーリーを膨らませる～

作家の言葉にはストーリー性があり，児童は非常に興味を示した。また，流木の作品も「それは，海からやってきた○○である・・・」という設定でつくり始めていた。そこで，作品に関するストーリーも解説の文章を書く上で大切な要素だと考え，イメージマップ（資料３）を使って，イメージや想像を膨らませた。

児童は自由に発想し，とても楽しいストーリーができあがった。イメージマップだけを使って「私の流木ストーリー」を書いた児童もいたほど，メモの内容は豊かであった。

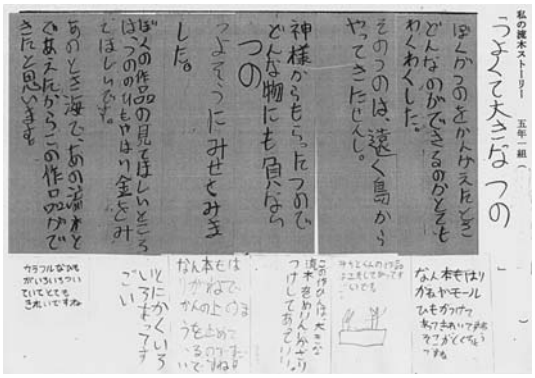
⑤　作品への感想を述べ合う　～友だちの作品を見て，良いと思った点や質問してみたいことをメモして渡す～

でき上がった作品を広い教室に並べて鑑賞し合い，いいなと思ったところや，作品について質問してみたいことを付箋にメモして作者に渡した。もらった付箋をうれしそうに自分のシートに並べて貼り，それを眺めながら次の構想メモを書く姿が見られた。

友達も自分の表現の良さを分かってくれたというううれしさや自信から，解説の文章に伝えたい良さをしっかりと書くことができた。さらに，友達からの質問に答える内容が文章に表れていることからも，感想の付箋は，有効だったと考える。

⑥　情報を取り出す　～文章に書きたい内容を絞り，短冊メモに書きながら文章構成を練る～

今までに集めてきた様々な資料を振り返り，読み直して，自分が伝えたいことは何かを明確にした。そして，短冊状のメモに短い言葉で書き表しながらシートに貼り（資料４），順番を入れ替えたり，書き足したり，削除したりしながら，文章構成を練り上げていった。短冊メモを書くことで，自分が伝えたいことが焦点化され，思いを伝える文章となった。



資料４（短冊メモと感想の付箋をはったシート）

⑦　思いを伝える　～短冊メモを基に文章を書き，作品と共に展示する～

ここでも，様々な資料を読みながら今までの経験を振り返り，

短冊メモを膨らませて文章を書き上げた。

（資料５）そして，学校行事である国府子どもまつりに合わせて「にじっこミュージアム」を開き，作品に文章を添えて展示して，多くの方々に見ていただくことができた。

会場には，感想シートを用意しておき，参観者（主に児童の保護者）から作品に対してと，解説の文章に対して感想を書いてもらった。学習のまとめに使おうと考えたのである。

・流木を探しに出て，すぐにほしい流木は見つかった。そのとき，ぼくは，この流木たちはどんな所から来て，どのくらい海に流され，波にうたれて旅をしてきたのだろうと思った。その中で一番近くにあった流木を手に取り，見ていたらだんだんメダカのように見えてきて，生き物を流木でつくろうと思い，不思議な流木をつくり始めた。
（　流木日記を活用した記述　）
・この作品でぼくがつくった魚はあなたがこの作文を読むまで，ちがったものに見えていたかもしれません。人間は，みんなちがってみんないいので，見えたものもちがっていいのです。あなたが目にしたものは何でしょうか。水族館に行ってみると，水そうの岩かげに，こんな魚がかくれているかもしれません。
（　作家の言葉や友だちの感想を参考にした記述　）

資料５（児童が書いた作品説明の文章より）

⑧　振り返り　～感想シートを読んで思いが伝わったかどうか確かめる～

自分宛ての感想シートを読んで，伝えたい思いや考えが伝わったかどうか確かめた。思い通りに伝わって満足したり，違った見方でとらえられていることに驚いたりしながら，今回の学習活動をやり遂げた達成感をそれぞれが感じ取っていた。思いを言葉にして伝える楽しさが次の活動への意欲となっていた。

⑸　実践から見えてきた課題

①　教師のイメージと児童のイメージのずれ

教師が呼びかけた「にじっこミュージアム」であるが，児童には「ミュージアム」がどんなものであるか具体的なイメージとして捉えられていなかった。そのため，目的意識や相手意識を明確にもたせることができなかった。

②　活動の中でのスモールステップの必要性

自分が何を伝えたいのか明確になっていなかったため，それらの中から情報を抜き出すということがなかなかできなかった。何についての情報を取り出そうとしているか，テーマにかかわり焦点を絞り込むステップが必要だった。

③　対話形式での鑑賞活動の重視

話し合いによる相互評価の場面では，感想を書いて渡しただけで，それに対する反応や答えを返すところまでは深まらなかった。対話形式の感想の交流を鑑賞活動としてしっかりと位置付け，表現における自己の確立を目指さなければならない。

５　実践Ⅱ：「新発売！流木ＴＯＹ」（６年生）

⑴　題材の目標

流木の形や質感を生かして，実際に遊べるおもちゃをつくる。

⑵　題材について

本題材は，海岸で出会った流木から発想を広げ，おもちゃづくりに取り組むという題材である。前年度の課題を踏まえ，目的意識・相手意識を明確にするために，それぞれが玩具メーカーの社員で，新発売のおもちゃを企画開発しているという設定で取り組む。作品制作前のアイディアシートとして書いた「企画書」には，そのおもちゃの対象者なども書いたため，作品制作時も相手を意識した意欲的な取組が見られた。制作途中には，「中間報告書」として思いや気付きの蓄積を行う。これを担任（玩具メーカー社長）に提出し，制作に関して話し合っていくことで，おもちゃに関して伝えたい思いが明確になっていく。

であい	○流木の形や質感の面白さに触れ，制作への意欲を高める。 ・流木でおもちゃを作ってみよう。㈱Rainbow toy発足 ○制作するものを決め，構想を練る。 ・おもちゃの企画書として，アイディアをまとめよう。 ・自分が使う材料や技法を選んで準備しよう。
ひろがり	○相手を意識しながら，実際に使えるおもちゃをつくる。 ・流木の形や色，質感などの特徴を生かしながらつくろう。 ・おもちゃの対象者を意識して使いやすいおもちゃになるよう工夫しよう。 ・友達の表現方法を参考にして，自分の作品を見つめなおそう
ふりかえり	○できあがった作品を鑑賞する。 ・「流木ＴＯＹ博 in 歴史の里会館」を開いて作品を展示しよう。 ・友達の流木ＴＯＹを使って感じたことや発見したことをカードに書こう。 ・自分の思いや友達のカードを基に流木ＴＯＹの説明書を書こう。 ・流木彫刻家の方から作品や作品展についてアドバイスをもらおう。 ・歴史の里会館に作品と説明書を展示して多くの人に見てもらおう。

資料６（指導計画）

本題材で書くのは，おもちゃについて説明する文章であるが，実際のおもちゃの説明書等を活用しながら，書く必要がある内容についてしっかりと把握していく。ここでのおさえが文章を書くための情報を取り出す際に生きてくる。

そして，説明書の下書きができた段階で，対話形式での鑑賞活動を取り入れる。友達の感想を下書きに直接書き込むことで，説明書をしっかりと練り上げられるようにしたい。

できあがった作品を「おもちゃ博」として歴史の里会館に展示し，訪れた方に説明し，使っていただくという活動も説明書を書くための目的意識を高めるために有効であると考え設定した。展示に関わって，歴史の里会館の職員の方や来場者の方々と交流したり，宣伝活動をしたりといった活動は，総合的な学習として行い，地域への思いを深めていくきっかけとしたい。

⑶　指導計画（資料６）

⑷　実践の概要

①　目的意識をもたせる　～株式会社Rainbow toy社員としておもちゃの企画開発に取り組む～

導入の段階で全員に一人一人が玩具メーカーの社員であることを告げた。子どもたちはこの設定が気に入ったようで，大変意欲的に活動し続けた。ただ，流木でおもちゃをつくろうと投げかけるだけでなく，社員として商品化できるようなおもちゃづくりに取り組もうという設定は，とても有効であった。

②　相手意識をもたせる　～流木ＴＯＹ博での展示を目指す～

本校の校区に「五智歴史の里会館」がある。地域の方や観光客が気軽に利用できる多目的施設である。その施設内の広い休憩室に作品を展示し，様々な方から見てもらおうと呼びかけると，子どもたちは「すごい。」と目を輝かせた。地域の方のみならず，訪れている多くの観光客の方々にも見てもらうことになるため，表現活動への取組も大変真剣なものとなった。

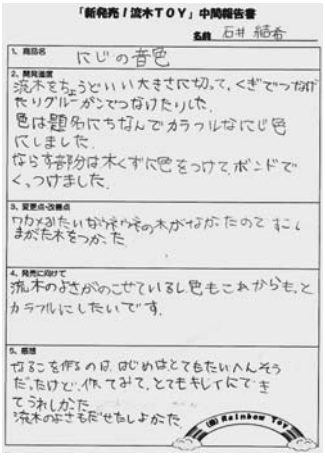
③　情報の蓄積　～作品制作への思いや制作中の気付きを「企画書」「中間報告書」に書き記す～

作品制作に向けてのアイディアを企画書（資料７）としてまとめた。そこには完成予想図や価格，対象者などの項目がある。子どもたちは企画書を発表し，社長（担任）から承認印をもらっておもちゃ制作に取りかかった。

こうしたステップを踏んだため，子どもたちは，実際に使う人のことを考え，普段より丁寧に作業を進めた。

また，制作途中の思いや気付き，問題点などを中間報告書（資料８）として書いた。これにより，活動が行き詰ったり中だるみしたりすることが避けられた。

資料７（企画書）



資料８（中間報告書）

④　説明書の構成要素を考える　～実際のおもちゃの説明書を読んで，おもちゃの使い方や特徴が分かる説明の仕方を捉える～

おもちゃ売り場に行くと，商品の宣伝用にその特徴や使い方などが分かりやすく表示されている説明書が置いてある。それらを幅広く集め，子どもたちに見せてその特徴について考えさせた。すると，説明書に必要な要素がいくつか分かってきた。これらは，実際に自分たちが説明書を書くときに大変参考になった。

・読んだ人が興味をもつような魅力的な見出し（内容のまとまりごとに）　・読みやすい短めの文章
・親しみやすい文体　・写真や図の効果的な利用　・レイアウトや構成の工夫

⑤　情報を取り出す　～企画書や中間報告書をもとに活動を振り返り，説明書の下書きを書く～

前時に見つけたいくつかの特徴を参考にしながら，自分のおもちゃについての説明書を書いた。子どもたちは，自分がつくった作品の写真や遊び方の説明図，特徴を説明した文章など様々な要素を入れていた。全体的によく書けていたが，この段階では，まだ伝わりにくい部分もあった。

⑥　説明書に関する感想を述べ合う～友だちのおもちゃと説明書を見て，良いと思った点や分かりにくい点について話をする～

下書きの説明書をよりよいものに練り上げるため，友だちに見せてアドバイスをもらった。話をしやすい４人程度のグループで，実際におもちゃを見せながら説明書に沿って説明をしていく。「流木ＴＯＹ博」の当番の際のリハーサルも兼ねている。おもちゃを手に説明していくとやはり使い方などで伝わりにくい部分が分かってくる。また，分かりやすい部分も見つけてもらえる。子どもたちは手に赤ペンを持ち，下書きに友だちからのアドバイスを書き込んでいった。

⑦　説明書を練り上げる　～友だちの感想を参考にして，説明書をより分かりやすく書き直す～

前時に友だちから得たアドバイスを参考にして，自分の説明書の内容やレイアウトを改善しながら清書した。（資

料９）「おもちゃを使う人の立場にたって出してもらったアドバイスは，どれも適切で，子供たちの説明書は，とても分かりやすいものになった。子どもたちは文章を書き直すだけでなく，写真を貼ったり色を工夫したりして，実際の展示に備えた。

⑧　思いを伝える　～流木ＴＯＹ博で作品と説明書を展示し，来場者と交流する～

実際の展示の前に，地域で流木を使った彫刻作品をつくっている方と交流した。この方も五智歴史の里会館で作品展をされており，子どもたちにとって大先輩である。ご自分の作品を見せながら，展示の際，気をつけることなどを教えていただいた。また，子供たちの作品を誉めていただき，みんなが展示に向けての意欲を高めることができた。

いただいたアドバイスをもとにチラシやポスターをつくったり，テレビやラジオ，新聞を利用した宣伝活動に取り組んだりして，いよいよ本番を迎えた。交代で当番をしながら，夏休みいっぱい開かれた流木ＴＯＹ博では，来場者におもちゃを手にとって遊んでもらった。作品について説明したり，一緒に遊んだりしながら，自分たちの思いを伝えることができた。

資料９（清書した作品説明の文章）

６　研究の成果

本研究で取り入れた言語活動についてそれぞれ次のような成果が得られた。

⑴　制作にかかわる思いの蓄積

制作に取りかかると，様々な思いが胸の中に浮かんでくる。本研究では，こういう風にしたい，うまくいかない，気に入った，といった思いの数々を日記やシートに書き溜めていった。それらを後で振り返ることで，作品説明の文章が豊かなものになった。思いは鮮烈なものでなければやがて消えてしまう。しかし，何らかの形にして残しておけば，表現活動の大切な資料となることを確かめることができた。

⑵　表現活動に対する相互評価

作品そのものや，それを説明する文章を紹介し，感想を述べ合う活動は，個々の表現活動を高めていく上で必要不可欠である。実際に相互評価により自分と違った考え，新しい考えに出会ったとき，子どもたちは変化成長を遂げた。自分の考えをしっかりともち，それにこだわっていくことはとても大切であるが，新しい自分を紡ぎだすことも大切である。本研究で子どもたちは流木をどんどん魅力的に変化させ，作品説明も分かりやすく改善していった。友だちとの意見交流は新しい自分に出会うために大変有効であったと言える。

⑶　作品と共に展示する作品説明の文章

図画工作での体験を言語化し，文章として表したことで，心の中に散逸していた制作意図や，制作時の様々な思い，重ねてきた経験などが明確に顕在化した。これにより，自分の作品の特徴をしっかり捉え，自信をもって展示することができた。また，作品と併せて友だちの書いた文章（作品説明）を読むことで，表現者の作品への思いをより深く理解したり，自分の感じ方との違いを楽しんだりすることができ，能動的な鑑賞活動が展開された。

７　今後の課題

本研究では，言語活動にこだわって図画工作の実践を行った。思いを言葉で表し，文章に書いたり話したりすることで制作・表現活動の充実を図った。しかし，図画工作科における思いとは，必ずしも言葉にできるとは限らない。うまく説明できないけれど，心に強く感じていることを表現する，作品の説明を丁寧にせずに自由に感じ取ってもらう，そういった心の内面での動きも大切にしなければならない。そう考えると，言語活動というものをもっと柔軟に幅広く捉えていく必要があると感じる。新学習指導要領の内容に基づき，より魅力的な図画工作科への授業改善を目指し，さらに踏み込んで研究を進めたい。

〈引用文献〉

１）３）小学校学習指導要領（平成20年３月告示）　p16　P83～87　２）林建造　「造形教育の探求」日本文教出版株式会社　1988　p160　４）「教育美術No.793」財団法人教育美術振興会　2008　p31

〈参考文献〉

大坪圭輔・三澤一実　「美術教育の動向」　武蔵野美術大学出版局　2009
辻村哲夫・遠藤友麗・永井順國　「アート・感性・共生」　紫峰図書　2003
初等教育資料　No.835，838，840，850」　文部科学省　2008